

地図帳から今を読む

—「日本の海外進出企業」を例に—

東京大学教授 荒井良雄

1 目の前の不条理

地図帳の巻末近くにある資料ページは、結構な分量を占めているが、おおかたの中学生にとっては、「無味乾燥な情報が並んでいるだけの退屈なページ」というあたりが率直なところではないだろうか。地理好きの子にとっては、基本図や拡大図は、眺めるだけで見知らぬ土地への空想をかき立てられる（…と期待したい）ものだし、その回りに散りばめられている資料図なら地誌的な連想が働くから、まだ親しみやすいだろう。しかし、世界や日本の大局的な事象を扱うことの多い巻末資料ページは、項目列挙式に並んでいるだけで、具体的な地理イメージを投げかけるものではないから、（まじめな子だったら）知識の確認のために見ておこうということはあっても、じっと眺めて考え込むといったことはめったにないのではないか。たしかに、人口、食料、工業、…と並べられている図は、現代社会の核心を突く事象ぞろいだから、その意図するところを的確に読みとるのは、大人にとっても結構むずかしい。子どもたちが敬して遠ざけがちになるのも宜なるかなである。

しかし、これらの図が、彼らの目の前で起こっている切実なできごとの原因を解き明かしていると知ったらどうだろうか。昨年（2008年）秋ごろから急速に深刻化した不況の中で、多くの人々が職を失ったり、大幅な待遇悪化

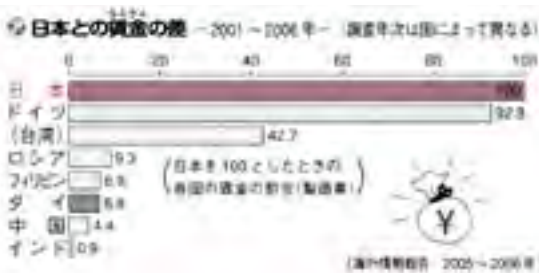
に甘んじなければならなくなった。就学支援の要望が全国で急増しているとのことだから、この地図帳を使っている中学生の中にも、親御さんが職を失ったり、友だちの家族が苦況にあるといった子が結構いるだろう。そこまでいかななくても、失業の問題は年末から春にかけて、マスコミが盛んに取り上げたから、どんな中学生にとっても、けっして遠い世界の話ではないと感じているにちがいない。しかし、そのような不幸なできごとの寄って来る由来を、普通の教科書は教えてくれない。今回の不況は世界経済と国際金融の構造変化が複雑に絡んで起こったものだから、簡単に説明できるようなものではないのは当然だが、理由が皆目見当もつかない中で身近に不幸が広がっていくというのは、まさに不条理としかいいようがない。せめて、そうした事態の内実を知ってもらいたい。

地図帳の資料ページは無味乾燥かも知れないが、その豊富な情報をうまくたどれば、国際経済の複雑さを乗り越えて、事態をなんとか理解できるのではないか。『中学校社会科地図 初訂版』（以下、『地図帳』）122ページの「日本の海外進出企業」を最初の手がかりに、今回の不況の背後で進行したメカニズムを読み解いてみよう。

2 雇用不安をもたらしたもの

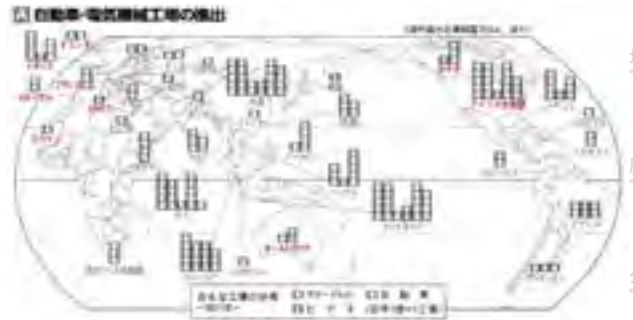
この年末・年始に、東京の日比谷公園を埋

め尽くしたテント村の映像は衝撃的だったが、今回の不況では、これまで日本の産業を牽引し続けてきた自動車や電機業界が大幅な人員削減を実施した影響が小さくなかった。これらの業界では、工場で大量の臨時工や季節工を使っているが、米国や欧州などでの販売不振を受けて大規模な生産調整に入ったために、そうした非正規雇用者の削減が進められたことが、日比谷のテント村という事態につながっていったのである。しかし、こうした人員削減は偶発的な事態ではない。日本は世界的に見て賃金水準の高い国だから、国内で生産した製品に国際競争力を持たせるのは容易なことではない。『地図帳』122ページの「日本との賃金の差」のグラフからは、日本の製造業がいかに高い人件費を負担せざるを得ないかを読みとることができる。工業大国として知られるドイツと比べてですら1.07倍以上、タイや中国といった途上国と比べれば15倍から100倍近い差がある。こうした中で、普段から人件費を極力圧縮しようとする圧力が働いているから、業績にかげりの出たとたん、人員削減に走る企業が続出するのである。



『地図帳』 p.122

もちろん、このような賃金格差は、最近になって急に始まったわけではなく、構造的なものだから、企業は長年にわたってこの問題に取り組んできた。同じページの「自動車・電気機械工場の進出」には、そうした企業の適応行動の軌跡がよく表れている。ここに描



『地図帳』 p.122

かれている工場進出には2つのパターンが混在しており、一つは生産費の圧縮を狙って人件費や土地代の安い途上国に進出するパターンであり、いま一つは有力市場となっている先進国に進出するパターンである。このうち後者は、米国を典型として、貿易摩擦回避を直接的理由とするところが大きいですが、潜在的には生産コスト圧縮の効果も期待した動きである。

同じページの「中国・台湾と日本との結びつき」の図からは、途上国進出パターンの代表ともいえる中国への企業進出がどのような動きであったかを読みとることができる。日本から中国への生産拠点移転のようすは、日本本土から中国のターリエン付近に向かって引かれた矢線で示されている。この図では、



『地図帳』 p.122

中国への具体的移転先と矢線の行き先が無関係のため、少しわかりにくい表現だが、日本からの移転元は、近畿から東海、北関東を中心とした工場であったことが読みとれる。進出した企業の業種は「日本企業のおもな生産拠点」の凡例からわかるように、食品、繊維、自動車などさまざまに広がっているが、テレビやDVD、パソコンなどの電機に注目してみると、ターリエン、シャンハイ、コワンチョウ周辺などにまとまった立地が見られる。

しかし、こうした企業進出の真の意味を理解するには、添付されている「中国と日本の貿易の変化」のグラフに注目しなければならない。日本から中国への企業進出が本格化するのは1990年代に入ってからだが、それ以来、中国への輸出と中国からの輸入が並行する形で急増している。この現象は、中国への企業進出が、単に、現地の原材料を利用する生産拠点設置であったり、輸出拡大のための現地生産拠点設置であったりしたわけではないことを示している。日本・中国間でやり取りされている製品は地図の右下側にイラストの形で示されているが、再び電機関係に注目すると、日本から中国へ送られているのは、半導体や機械部品などの生産財である一方、中国から日本へはテレビやDVD、パソコンなどの最終製品が輸出されている。中国の工場は、まさに日本企業が作り上げてきた生産体系に組み込まれた存在であり、本質的には日本国内のどこかの地方に置かれた工場と変わるところはない。そして、日本企業が中国に生産拠点を置く最大の理由は豊富で低廉な労働力である。

3 日本国内の空洞化

これだけ企業進出が相次いだのだから、移

転元となる日本国内の地域に影響が出ないはずはない。「中国・台湾と日本との結びつき」のヨンチョン付近には「大阪に本社のあるテレビ会社の工場が集まる地域」という注記が見られるが、当のテレビ会社の元々の生産拠点地域は『地図帳』123ページの「大阪府のテレビ工場の変化」に詳細が示されている。図左側の1985年時点ではテレビはまだブラウン管式であったが、基盤、電子部品、金型、ハーネスなど、さまざまな関連工場が守口市や門真市などに立地し、それらが茨木市にある最終工場へ集められてテレビが組み立てられていた。最も重要な基幹部品であるブラウン管も最終工場近くで作られていた。ところが、図右側の2004年時点になると、ブラウン管テレビは姿を消し、代わってプラズマテレビが生産されるようになっている。



『地図帳』 p.123 ⑦大阪府のテレビ工場の変化

ブラウン管が使われなくなり、液晶やプラズマなどの薄型テレビが中心になったのは、まさに技術の進歩であるが、この地域でとくにプラズマテレビが作られるようになったには理由がある。国際競争が激化する中で、テレビのような消費財は常に生産コストの削減が求められる。とくに、量を売る一般向け製品は競争が激しく、かつての主力製品であったブラウン管テレビは日本国内生産での人件費負担に耐えられず、途上国への生産拠点

移転が進められた。薄型テレビが登場した頃の頃は、価格も高く、生産が難しかったこともあって国内で作られたが、技術が安定するにしたがって価格も下がり、ブラウン管テレビと同様に海外生産されるようになった。それでも、大型主体で付加価値の高いプラズマテレビはとくにコスト負担力が高く、発祥の地に生産拠点を残すことが決断された。しかし、こうした高級品は生産数量が少ないから、多数の関連工場を置く必要がない。移転または閉鎖された関連工場の記号が多いのはそうした理由による。

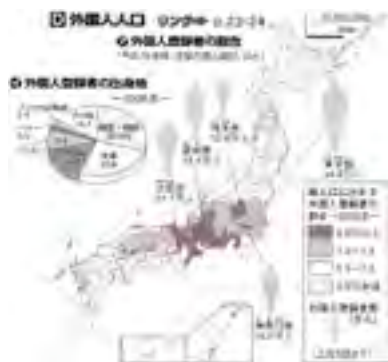
高級品のみを残して国内生産を縮小した電機の場合は、地域産業が空洞化した典型的事例だが、自動車などでは別の形での影響が見られる。『地図帳』117ページ「D 外国人人口」の「外国人登録者の割合」を見ると、大都市であってもともと外国人の多い東京都と大阪府を除くと、愛知県に住む外国人の数が最も多い。これは、自動車などの工場で働く外国人が多いことを反映している。周知のように、日本政府が日系ブラジル人の労働者としての受入を認めるようになったため、1990年代から工場で働く日系ブラジル人が急増している。自動車関連の工場が集中する愛知県ではそれが顕著で、ブラジル人がコミュニティを作っている住宅団地がいくつも存在する。もちろん、来日外国人の賃金水準は本国より

はるかに高いが、質を考慮すれば日本人よりは相対的に安上がりなので、国際競争にさらされている企業が大量雇用に走ったのである。今回の不況で直撃を受けたのは、まさにこうした人々であった。子ども連れて来日したり、日本で子どもが生まれた親が職を失い、日本で子どもを学校に行かせることもできず、かといって、ポルトガル語が十分ではない子どもを連れてブラジルにも帰りがたい家族の苦悩を取り上げたマスコミ報道もよく見かける。

4 生きた学習のために

率直なところ、地図帳の巻末資料ページは些か退屈である。このような図表を扱うことを商売とする筆者のような者でも、何のきっかけもなく、こうしたページを開いて読みふけるといったことは滅多にない。しかし、一見無味乾燥な資料の羅列であるが故に、その情報量は膨大であり、それを読み解く基礎さえあるなら、極言すれば、何でもわかる知識の宝庫である。もちろん、地図帳という書物は、多かれ少なかれ、そうした性質を帯びざるを得ないものであり、おもしろさがわからない、どう使ってよいかわからない、などという声をよく耳にする。巻末資料ページはその最たるものなのかもしれない。しかし、使いようによっては、今回の不況のような極めて複雑な現象を理解する手がかりを十分に与えてくれる便利な材料でもある。メカニズム自体は複雑でも、取り上げる現象が子どもたちにとって十分リアリティを感じられるものであるならば、その関心を引きつけることはできよう。であれば、あとは、図の背後に秘められた物語を読みとり、語り伝える役割を果たすべき教師の側の問題である。

地図帳の奥は実に深い。



『地図帳』 p.117